ボールなんて、どっちに転ぶかわからない

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: あせごの, まん メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4473

ボールなんて、どっちに転ぶかわからない

あせごのまん

薄暗くて小便臭い地下道を上がると、さらに薄暗いアスファルトが線路に沿って延びていた。傍らには汚臭を放つドブ。

駅の向こうのソープランド街みたいな陽気さに比べて、まるでひなびた漁港にでも降り立ったみたいな気分になる。そういや、地下道の階段の黒っぽいコンクリートは、打ち寄せる波にでも洗われたみたいにザラザラと荒れている。

「物騒やの。街灯くらいつけろや」

部員の一人が呟いたとたん、前方で炎が上がった。不満の声に応える市役所員の手早い対応などではない。ラグビー部の帰宅を歓迎して、誰かが盛大にロウソクを灯したなんてことも、もちろんなかった。

「燃えてんの、インドの原チャやない？」

「なんでやねん！」絶叫一発、そのインドが走り出した。

イチローもヒラメも走り出す。が、たったそれだけの距離を急いだからといって、炎を上げている原付バイクを瞬間冷却する手段が天から降りてくるわけでもない。

闇の向こうの炎の周りに、なにやら楽しそうに乱舞する黒い影が見えた。矢のようなインドの突進がそいつらを蹴散らした。

と思ったら、ペェペペ、ペェペペと甲高い排気音。

「そっち行ったぞ！」

え？　そっちがどっちかも分からず、右往左往する間もない。排気音があっという間に迫って、無灯火かよ、なんてのどかに考えるいとまも与えられず、何気なく腰を低くした途端、「どかんか、ボケ！」という怒鳴り声と同時に、靴の裏が増穂輝男（ますほてるお）の目の前に現れた。

気がつくと、増穂はアスファルトの上に寝ていた。いきなり喉にぬるりとしたものが入り込んできて、うわエイリアンに卵を植え付けられる、と一瞬ＳＦ的な勘違いをしたあと、盛大に咳き込んだ。全身が痙攣したかのような咳き込み方で、そんなに激しく何かを吐

き出そうとした（いや空気を吸い込もうとした？）のは、数年前鎖骨を複雑骨折して、手術後全身麻酔から無理矢理目覚めさせられた時以来のことだ。

「早よ引き上げろや」

「重いねんて」

この声はエイリアンではなく、顔なじみのメンバーたち。

自分はどこへ引き上げられようとしているのか、と治まりかけた咳を吐き出すと、血の塊が唇をぬらした。一体何事？　訳のわからないまま増穂は改めて周りを見回した。

「こんなヘドロまみれの原チャ、もういらんのちゃいますか？」

「おのれがドブへぶち込んだんやろ！」

「いや、燃えてるの見た瞬間、焦ってしまいましてん。ガソリンに引火して爆発したら、オレら線路の向こうまで吹っ飛ばされるかと思うて」

「もうええやんけ。見せしめにこのまましとこうぜ」

イチローは今まで助け上げようとしていた原付バイクを踏み台にして、アスファルトの上へ飛び上がった。

「見せしめてなんですのん？」

「ほら、平和記念館とかに死体写真とか飾ったあるやんけ。あれや」

「つまり、このどぶが平和になるようにと？」

「そう、ドジョウやフナが安らかに暮らしてほしいなと」

「すでに絶滅してますって！」

失神から蘇った増穂が教えられたところによると、どうやら近所の中学生どもがインドの原付バイクに火を放ち、たまたま来合わせた太陽学園大学ラグビー部員が見つけて追いかけたが、悪ガキどもは素早く散開し、ヒラメが燃える原付をどぶに投げ込み、無灯火で逃げるガキの原チャキックを増穂が顔面で受け止めて、一瞬あの世へ旅立ちかけたということらしかった。

六畳プラス板の間一畳の空間に男十人がひしめいていた。一人当たり約〇・七畳という計算は成り立たない。というのも、その空間にはテレビや机や冷蔵庫なども同居しているからだ。まあ要するに大人がのびのびと身体を横たえるには適していない空間である。

ここに集う学生たちのうちラグビー部員は八人で、残りの二人はサッカー部からの臨時要員である。金城史郎（かねしろしろう）という、変に韻を踏んだ名前の小太りの四年生と、その後輩の増穂輝男という、こちらは韻を踏み損ねた名前の二年生が、サッカー部からの手伝いであった。

もう一人アメフト部から永友洋（ながともひろし）が応援に駆けつけていたのだが、練習試合が終わるとすぐアメフトの練習があるとかでとっとと帰っていった。さらに途中の駅でラグビー部四人が抜け、この古ぼけた下宿には肩を落とした十人がたどり着いたのだった。

アーアと一人がため息をついて天井を見上げた拍子に、後頭部が背後の壁にドンとぶつかった。建物全体がピキピキッとポルターガイストでも跋扈してそうな音を立てて揺れる。天井からは何かのフンだか卵だかわからぬ顆粒状の黒い物体が落ちてきて畳の上で跳ねた。太陽学園大学の創立とともに作られたという伝説の下宿である。

それが本当なら、築八十年にもなる。落ちてきたのが天井でなかったことを喜ぶべきかもしれない。

「今日はホンマ、腹立つことばっかやんけ！」インドが目の前の黒い顆粒を、フーフーと吹き飛ばしながら言った。ちなみに、本名は八木敦（やぎあつし）と言うが、百九十二センチ百十五キロの日焼けした巨体に天然パーマで、仲間からはインドと呼ばれている。

インドが言うのは、ハーフウェイライン付近でのスクラムで試合が再開された場面。後半開始後二十分過ぎのことだった。NO8のインドがボールを足で掻き出した。

ちなみに、目の前にあるボールを足で後に送るなんて下品だか不便だか判然としない行為は、密集内にあるボールに対して手を使ってはいけないというラグビー独特のルールによる。

スクラムハーフの田村亘（たむらわたる）がそれを素早く拾い上げ、スタンドオフ枯木英司（かれきえいじ）に送った。

配置図でおわかりの通り、この時ボールは後ろへ後ろへと送られるのである。なんで後へばっか、と悩むほどの素人は今さらいないと思うが、ラグビーというのは前にボールを投げては行けない、もちろん落とすのもダメ、という不便なスポーツなのだ。

だが、他のフィールド競技と同様、ゴールラインは前にある（図では上）。

（ここでラグビーのポジションを把握しない人のための配置図）

7右フランカー　14右ウイング
3右プロップ　13右センター
5右ロック
2フッカー　8ナンバーエイト　9スクラムハーフ　10スタンドオフ　15フルバック
4左ロック
1左プロップ　12左センター
6左フランカー　11左ウイング

状況が許すなら、プレイヤーはどこまでも前進してかまわないのだが、そうは問屋が卸さない。相手が邪魔をしにくるからだ。そこでパスをする。後ろへ。その際ボールを持ったプレイヤーは元の位置より前に進んでいないと、いつまで経っても同じ場所でばかりみんながボールをやりとりして過ごす、あるいは後へ後へと進んでしまう、というアホみたいな現象が起こる。

何となく間抜けな雰囲気が漂ってしまうので、TV中継のアナウンサーはそんな時、「ゲインラインを突破できません！」と格好良く言い換えなくてはならない。「国会並みの牛歩戦術です」などと言ってはいけないのである。そもそも戦術ではないのだし。

というわけで、ボールを受けた枯木は向かってくる一人をハンドオフ（相撲ではこれを張り手と呼ぶ）でかわして、右センターのヒラメにパスを繋いだ。

ヒラメというのは、魚から連想されたあだ名ではない。本名が

平目誠二というのである。

ヒラメは隣を見もせず、タップパスを左に送った。タップパスというのは、むかつく野郎の顔面を平手打ちするみたいに、ボールの横っ面を張り飛ばして隣へ送るパスだが、ボールの飛んでいく角度や、隣にいるはずの身方の位置、はたまた迫り来る相手のスピードなど色んな状況を一瞬で判断する、やってることの割には、けっこう高度なプレーである。まあ元メジャーリーガーイチローの背面キャッチなみに「オレもやってみてー」というプレーといっていいかもしれない。

ぶっ叩かれたボールは誰もいない地面に落ちる寸前で、走り込んできたフルバックのイチローが受け止めた。百八十六センチ九十六キロ。そんな体格を有するフルバックというと、誰もがワールドカップ・イングランド大会で史上初の三勝を上げながら決勝トーナメント進出を逃した、ジャパンの十五番五郎丸歩を連想するだろう。だから、「タイヨー（学園）のイチロー丸」と仲間うちでは呼ばれていたが、実を言えば、全国的、どころか関西リーグにおいてすら全くの無名であった。

イチローはトップスピードでテンメートルラインを突破した。ディフェンスを引きつけ、一番外へパスを送る。待ち受けていた右ウイング、とは言っても即席のポジションだが、増穂の懐にボールがすっぽり収まった。ラグビーは初心者レベルだが足だけは速い。増穂はそのまま二十二メートルラインを突破した。増穂の前にはゴールまでの道が真っ直ぐ開けているように見えた。

「そのまま行けぇ！」

相手方のウイングが横合いから迫る。軽々とサイドを抜いていくと思った皆の予想に反して、増穂は敵に恐れをなしたのか急にスピードを緩めた。それが逆に意表を突いたらしい。相手ウイングは増穂のジャージに手をかけながらもその前を吹っ飛んでいって、サイドラインの向こうへ転がった。

その一瞬の間にディフェンスが体勢を立て直した。相手フルバックが迫り、センターも追いついてきて、敵と味方が殺到、そのままコーナーポストを薙ぎ倒して、タッチラインを蹴散らし転がっていった。

「ＴＭＯ！」左フランカーの坂田球太が顔の前に大きな四角を描いた。ワールドカップで主審がトライか否かを判定するために宣告するあれ、テレビジョン・マッチ・オフィシャルというやつだ。

「アホか」選手から笑いが漏れた。

たかが大学グラウンドの片隅に、カメラなど設置されているわけがない。しかも練習試合、審判は向こうの控え選手である。

まごまごしている主審に代わり、相手方喜連瓜破外国語大学の監督が出てきて、勝手にラインアウトを宣告した。

「ええー！」

そんなのあり？　それなら太陽学園だって監督がすっ飛んでいくぞ！　って意気込んだところで無理な相談なのである。だって、太陽には監督がいないし。コーチだっていない。実を言えば、コラコラそんなんで練習試合を申し込むなよ、って言いたくなるようなチー

ム体制なのであった。何せ、十五人のメンバーが揃わず他部からの応援を頼むくらいなのだから。

「天気が悪くなってきたぞ。サッサと並べ！」

相手方の監督には寄せ集めチームに対する敬意などこれっぽっちもないらしい。太陽学園側に向かって命じると、後も見ずにベンチに戻った。

「あれ、絶対インゴールに入ってたけど」増穂が呟いた。

残り時間十五分で、四十八ー七の点差四十一。今さら逆転できるわけでもないけれど、何だか無性に腹立たしい。

「舐められてんな」四年生の松尾雄三（まつおゆうぞう）が唾を吐き捨てた。

「文句あんのか、ボケ」ラインアウトに並んだ相手フォワードの誰かが怒鳴った。

「何やと、コラ！」

頭を冷やせと囁くかのように、雨がポツポツ落ち始めた。

「早く始めろと言ってるだろうが！」ベンチから監督の怒声も飛んできた。

拳を握りしめたインドをキャプテンの小林敏之（こばやしとしゆき）が押しとどめる。

「その悔しさは本番までとっとけ」

「何やねん、キャプテンみたいに！」

「いや、キャプテンなんだけど」

そんなやりとりをしている間にも、ますます雲行きが怪しくなってきた。小雨交じりの風が強く吹き始める。ＢＢ弾のような雨粒が顔にパチパチと当たり、目を開けているのも苦痛になるほどだ。太陽学園にとってはとんでもない逆風で、渋々並んだ相手ラインアウトのボールは風にあおられ大きく太陽側へ逸れた。目の前に転がったボールに焦った、スクラムハーフの田村亘がボールを押さえ損なった。

「ノッコン！」と、審判が手を上げる。つまり、ボールを前に落としたという反則である。

「待てや！　その前にノットストレートやろ！」

ラインアウトは二列に並んだ真ん中にボールを投げ入れなければいけない。なのに、風にあおられて大きく太陽側に逸れたのだから、そっちの反則が先だ。

「もういいんじゃないかな、太陽さん」相手監督が立ち上がっていた。「このコンディションにこの点差だ。これ以上続けて怪我人が出ても困るだろう」

「テル、病院行かんでええんか？」

部屋の隅では、先ほど原チャリキックを食らったサッカー部員増穂輝男が濡らしたタオルを鼻に当てて寝っ転がっていた。

どれどれと堀昌美（ほりまさみ）がタオルをめくって覗き込む。「うーん、大丈夫そうやな。折れてなさそうやし、鼻血も止まったわ。フォワードやったら、そのくらいしょっちゅうあるこっちゃ」

白いパンツを真っ赤に染めながらスクラムを務め続けるフォワードなんて、国際試合じゃなくたっていくらでも見かける。

特に最前列のプロップやフッカーはスクラムで身方と敵の接点に

なるポジションだ。このポジションは高度な技術と身体能力が要求される。だから現在のルールでは、フロントローだけは特権的に選手交代が自由になっている。一度退場しても、また負傷者が出てフロントローがいなくなってしまえば、もう一度出ることができるのだ。もし怪我などでチームにフロントロー専門者がいなくなった場合、その試合のスクラムはノーコンテスト、つまり押し合いなしで続行される。現に二〇一九ワールドカップ日本大会では、南アフリカとイタリアの試合が、ノーコンテストスクラムで実施された。

「それはともかく、新入部員の方はどうなってるんや？　こんなんじゃあ、おちおち怪我もできへんぞ」

まあ訊かずともわかっていることではあるのだが。今日だってサッカー部とアメフト部からの応援をどうにか三人かき集めて、フィフティーンを確保した有様だし。その結果が、同じ関西のCリーグ中堅喜連瓜破外大にこの体たらくである。

「よし！　増穂、お前、ラグビー部に入れ！」突然、金城が後輩の肩を叩いた。「サッカー部におる限り補欠やし。ラグビー部ならいきなりレギュラーやぞ！　リベンジじゃ！　あんなヤツらにおちょくられたまま黙ってられへんやんけ！」

「ちょっと金城さん！　マジで言うてんすか！」

戸惑う増穂の声なんぞ、誰も聞いちゃいなかった。一同はトライでも決めたように拳を突き上げた。「よっしゃ！　あと二人でメンバーそろうぞ！」

○

「宿沢くん、元気か？」

ゴールデンウィークも過ぎ去った五月半ば、大西鉄也（おおにしてつや）が不意に研究室を訪ねてきた。大西は宿沢宏（しゅくざわひろし）の出身大学の大先輩で、この太陽学園大学就任を世話してくれた大恩人である。

大西は勧めもしないのにソファにドッカと座り込んで室内を見回した。「それにしても、何も変わっとらんな、この部屋」

ここは元々この三月で退職した大西の研究室だった。大学側は備品購入費節約のため、大西のお古をそのまんま研究室に残しておいてくれたのである。マジックで大西テツと落書きされたロッカーや、脂で黄色く変色した内線電話、朽ちた輪ゴムがあちこちにこびりついた事務机などなど。

「レターケースはどうなった？」

「はあ？　あそこに置いてますが」宿沢は本棚の一番奥を指した。

「ちょっと、見せてくれ」大西は勝手にレターケースの一番下を開け、奥から古ぼけた封筒を引っ張り出した。

「君なあ、ワシが置いていったもんがそのまま入れっぱなしやがな。錆びたクリップだの変色したメモ用紙だの、普通処分するやろ」

「そうですか？　いや、面倒なんで放置してあるんですが。そのうち整理しようと思って」

「まあそのおかげで、これも無事やったけどな」大西は封筒の中身を取り出して見せた。聖徳太子の五千円札と小銭が数百円。「ずっ

と昔、コンパ代に積み立てた残りや。すっかり忘れとったのに、何や不意に思い出してな。もう心配で心配で」
「わざわざそれを取りに？　電話ででも言ってくれたら送りますのに」
「いや、送る必要なんかないねん。ラグビー部はな、去年初めてＣリーグに昇格したんやけど、これはカンパするから、ええもん食わせたってくれ」
　意味がわかんねえんだけど。どうしてオレがラグビー部にいいものの食わせるの？　絶対足が出るじゃん！　って問題以前に何の話だか……。
「伝えるの忘れとったんやけどな、君、ラグビー部の顧問になってんねん。もうすでに協会には届け出してあるから」
　はあ？　寝耳に水だ。何かの冗談かと大西の顔をまじまじと見直したが、至って真面目な顔つきである。宿沢はこの年度の四月に、太陽学園大学に雇われたばかりだ。慣れない業務や授業の準備などにてんてこ舞いしているってのに、顧問なんて！
「私まだ一年目ですし……」
「いや、そういう問題やないねん。もう手続きも済んでるから」
　顧問を断る権利など端からないってことか？　本人の意向も訊かずに？
「ホンマ言うとな、監督かヘッドコーチが必要やねん。けど、誰も引き受け手がおらんわけよ」
　なぜなら、手当も残業代も出ないから。
　ラグビー部は今年で創部十五年になるが、一昨年までは体育会というよりは、同好会のノリだった。勝ち負けよりも楽しむラグビー、和気藹々と練習し、雑談に興じ、レクリエーションの一環として合コンや飲み会に血道を上げる。卒業したらそれで縁が切れ、ＯＢ会も存在せず、うるさいコーチや先輩もいなかった。
「そんなものに煩わされることもないんやから、まあよしとせなアカンやろ」
　文学部教授の傍ら長年監督を務めてきた大西はこの三月で退官になったが、大学は金のかかる監督やヘッドコーチなど呼ぶ気がないらしい。
「何もせんでええねん。持ってきよった書類にサインしてハンコ押すだけや。あとは何の面倒もない」
「大西先生こそ大学をお辞めになったあとも続けられたらどうなんですか？」
「わしゃ福井の田舎で、オヤジの跡を継いで農業することになっとんのじゃ」
「私、ラグビーは未経験ですし、他の先生方に……」
「宿沢くんは北島田忠治（きたしまだちゅうじ）の教え子やったと言うてたやないか」
　驚いたことに、何かの機会にしゃべった耳クソほどの小さな話題を、大西は覚えていたらしい。
　北島田というのは、宿沢の高校時代の体育教師だ。教えるのはラグビーだけ。一年間体育の時間はラグビーだけをやらされた。そんなもん、現代国語の時間にずっと夏目漱石ばかりやってるようなも

んじゃねえか。
　そんな教員だったから、関係者の間では有名だったらしい。出身高校と在籍年度を言うと、「ああ北島田先生の……」という反応がよく返ってきたものだ。
　だからといって、宿沢はラグビーが上手いわけでも、特別な思い入れがあるわけでもない。ずぶの素人よりは多少ルールを知っているという程度か。
「まあ経験あろうがなかろうが、何もせんでええんやから」と、押し切られることになってしまった。

　半月後。
「おお、やってるやってる」
　宿沢はG号棟の端からグラウンドを覗いた。すぐ前にいた女子学生が、その声に振り向く。
　ええと、彼女の名前は……練習が終わるまでには思い出そう、宿沢はそう思ったが、よくよく考えてみれば、彼女の名前どころか、部員の名前だって全然知らない。
　グラウンドでは、十二人の大男たちが小柄な少年を追いかけ回している。だが、誰一人、その小さな男にタックルを決める部員はいなかった。指が身体に届いたと思った瞬間、電流にでも打たれたように、ガクッと膝が折れる。あるいは、アクション映画のスタントマンのように、大げさに飛んでいくヤツもいる。小さな男は十二人を置き去りにして、ゴールポスト真下に飛び込んだ。華麗にダイブを決めて、スックと立ち上がって言い放つ。
「おらおら、下手くそ。真面目にやってんのかよ。Cリーグってこんなレベル低いんか？」
「ぶっ殺す！」一人が顔を真っ赤にして叫んだ。
「おう、やれるもんならやってみい！　ほら、もういっちょこんかい」小さな男が楕円球を蹴った。
　ハーフライン付近へ転がったそれをラグビー部員が拾い上げ、小柄な男の背後へ大きく蹴り込んだ。ボールは二二メートルライン付近で大きく跳ねる。チームで一番の大男がボールめがけて突進していった。
「あれは誰？」
「インドさん。いけいけぇー！　頑張ってぇ！」
　本当にインド人じゃねえよな。インド人と言っても通じそうな色黒の巨体だけど。
　だが、その腕がボールに届く直前、前を小さな身体が駆け抜けた。インドってあだ名の大男は勢いの付いたまま行きすぎて、二二メートルラインの向こうで、オットットとたたらを踏んでいる。もちろん手にボールはない。
　その頃にはもう小さな男は、目の前に迫る三人をすり抜けて、テンメートルラインに達していた。
「またトライじゃないか？」
「でも、小林さんが待ち受けてますよ」
「小林？」

「キャプテンです。左ロックでディフェンスの要」
あーあぁぁぁ……傍らの少女は悲鳴と落胆が入り交じった悩ましげな叫びを漏らした。
太陽学園自慢のロック小林が、グラウンドに転がっている。バックスの数人が小さな男のあとを必死になって追いかけるが、差はグングン開いていく。
「相手、ガキじゃん！」と叫んだ少女の目が不意に宿沢を見た。
「てか、あたな、どなたでしたっけ？」
「あ、オレ？」
宿沢もメンバーをろくすっぽ知らなかったが、この少女も負けず劣らず宿沢を知らないらしい。まあ当たり前ではあるけれど。宿沢がグラウンドに姿を見せるのは、これが初めてなのだし。
「宿沢宏。文学部のフラット講師。あ、フラットってのは日本語でヒラってことね。一応この部の顧問てことになってんだけどさ」
「顧問ですか？」少女が化物でも見たような顔で聞き返した。
「まあ幽霊部員と紙一重だからな。オレのこと知らなくても仕方ねえんだけど」
何の用事だと言いたげな表情だ。まさか言葉も出ないくらい顧問の登場を歓迎しているわけではないだろう。
「ところで、君は？」
「教育学部二年の上田昭子です。一応マネージャーやってます。さっき来たばかりなんですけど、何だかみんなで子供を追いかけ回していて……」
あ、何かいいね、このマネージャー。可愛くってスタイル抜群で、青春ドラマにぴったりだ。
宿沢は思わずにやけそうになる顔を引き締め、「どう？　あの一年生」とグラウンドを指さした。
「え？　あの子？」上田昭子が走る姿を目で追う。「ウッソー！　一年生ってことは、十三歳？　それは末恐ろしすぎます」
宿沢は思わず笑い声をたてた。「十三って中学生じゃねえかよ。一年は一年でも、あいつは大学生だけど」
「大学生！」
「そう、太陽学園大学文学部一年小畑大介（おばただいすけ）だ」
キックオフからまた小柄な身体がダッシュした。一年生の小畑大介は、ハンドオフで相手を跳ね飛ばすでもなく、手が触れるか触れないかの瞬間に、相手をねじ伏せるあるいはスルリとかわして、小刻みなステップでゴールポストへ突き進んでいく。
太陽学園ラグビー部はまたなすすべもなくグラウンドに転がった。小畑が二二メーターラインを越え、ゴール目前に迫った時、クラブ棟の背後から黒い影が現れた。
「あ、イチローさんだ！」昭子がパチンと手を合わせた。
イチローと呼ばれた長身の男はサイドラインの脇で二三度屈伸すると、グラウンドに飛び出していった。
うーんと……宿沢は考える。ラグビーのメンバー交代はどういう合図送るんだろうな？　監督が手をクルクル回すのはバレーボールだし。そういうことは宿沢がやる必要はないんだろうか？　てか、

まあ今は試合じゃねーから、どうでもいいか。
「彼は今までどこにいたの？」
「さあ、就活ですかね。四年生ですから」
しゃべっている間にも、イチローは弾丸のようなスピードで小畑に迫り、タックルに入った。
小畑がクルリと身体を反転させる。イチローのタックルはかわされ、勢い余った大きな身体は獲物を捕らえ損ねて、単独で吹っ飛んでいくかに見えた。
が、次の瞬間、小畑はまるで釣り針に引っかけられた魚のように一旦グンと空中に放り上げられ、すぐにイチローともつれるようにして、グラウンドを転がった。
「指がかかってたんだ！」
イチローは指先だけで小畑の服をつかみ、引きずり倒したのだ。
ゴールポストの真下だった。ニュッとボールを持った手が伸びた。ポンとボールが地面に置かれた。
「さすが太陽のイチロー丸やな。けど、オレの勝ち」
小畑をラグビー部に誘ったのは宿沢だ。やっぱりオレの目に狂いはなかったとかって青春ドラマなら呟くシーンだけど、結局宿沢は何も言わずにただ顎を撫でただけだった。
大西鉄は何もしなくていいと言ったが、現状では試合どころか七人制の紅白戦すらできない有様である。昨年の四年生が十六人も抜けてしまって、いくら期待のイチローや小林などCリーグで経験を積んだ上級生がいるとはいっても、試合可能な十五人さえそろわないのではどうしようもない。
だから、宿沢は二百人もが受講する教養の授業で部員募集を呼びかけたのである。今なら無条件でレギュラー保証だぞ……って、言って虚しかったが。
授業終了後、小柄な学生が宿沢の前に立った。「やってもええで」と。
馴れ馴れしい口調、おしゃれとはほど遠いもっさり感。宿沢は顔では嬉しそうに笑って見せたが、心の中では、もし十五人以上のメンバーがそろった暁には補欠候補の一番手だな、とひそかに嘆いた。まあ、強烈なタックルには耐えられないにしても、ボール磨きや部室の掃除くらいはできるだろう。
「君、経験はあるの？」
「全然。でも、Cリーグレベルのラグビー部には負けへんと思うし」
やったこともないと言いながら、こんな大口を叩く自信はどこから湧いてくるのだろう？　もしかしてとんでもねえ大物だったりして、と一瞬訝ったりもしてみたが、やっぱりこれっぽっちも期待する気にはなれない。
第一、身長が足りなさすぎる。百六十あるかないかだ。ダブダブのTシャツにボテッとしたズボンは、スポーツマンのイメージにはほど遠かった。スポーツをやるよりは、教室の隅でスマホゲームのキャラを操っていそうなキャラクターだ。
「信じてへんね、先生？」

「いや、何だっていいんだ。ともかく部員が一人でも多く欲しいんでね」

「何でもええって言い方はないやろ」小畑はニヤッと笑い、「先生、そこ立っといて」と、教卓と黒板の間を指さす。幅は一メートルあるかないか。

「オレが向こう側へ抜けるから止めてや」

そう言うと、宿沢に向かって足を踏み出した。こんな狭いところをどうやって……と思う間もなかった。宿沢はつかまれた手首の痛みに思わず膝をつき、その手の上を短い股下で小畑は堂々と跨ぎ越えていったのだった。何とか流っていう、聞き慣れない武道の技らしかった。

○

関西リーグの開幕が近付いていた。だが、メンバーは相変わらず足りない。なのに。

「みんな、どうしたの！　声出てませんよ！」グラウンド脇に現れた上田昭子が手でメガホンを作って叫んだ。「元気ないですやん！」

元気がないというより、不穏な空気に包まれているというのが正しい。些細なことをきっかけに、一気に不満が爆発しそうな変な緊張感だ。小畑が練習を放り出して帰ってしまったのである。

「オレかてバイト休んで来てるんですやん。四年の先輩は就活にも行かずに」吉田義夫（よしだよしお）が口を尖らせた。百七十センチ八十五キロのコロコロしたフッカーだ。

関西で吉田義男と言えば、プロ野球阪神タイガースＯＢの老解説者を指している。これは関西に住まう人間にとって問答無用の約束だ。

吉田の父親は現役時代名ショートと言われたその人にあやかって、息子に名を付けたらしい。もちろん、野球をやらせたいと願ってのことだったのだろう。だが、吉田はラグビーを選んだのだった。高校一年の秋、ワールドカップ・イングランド大会の南ア戦大逆転劇を夜中の三時にＴＶで見て、突然ラグビーに目覚めたのだそうだ。というか正確には、野球の才能がないと自覚したのだとか。

「うん、まあ色々事情があると思うから」小畑の不在をフォローするすべもなく、宿沢は立ち去りかねてずっと練習を見ていた。本心はとっととこの場から消え去りたかったのだが。

「それじゃあたしが元気出させてあげますね！　今日から部員が増えまーす！　ジャーン」昭子が効果音を自ら発して、両手を伸ばして掌をヒラヒラさせる。「はーい、どうぞ来て！」

クラブ棟の陰からノソノソと姿を現したのは、ヒョロッとしたおかっぱ頭の眼鏡男子。そいつは頬を赤く染めて弱々しい笑みを浮かべ、頭を掻きながらサイドラインの脇までやってきた。

こいつが新入部員だって？　いらねーよ……宿沢は顧問として正直な感想を、心の中で思いっきりつぶやいた。どう見たって、弱そうじゃんか。第一印象は小畑を初めて見た時と似たり寄ったりのレベル。だけど、昭子の隣で頬を染める姿には、あの不敵な自信はか

けらもない。
「ラグビーの経験は？」集まってきた部員を代表して、キャプテン小林が訊いた。
「アハ、ありません」また頭を掻きながら。
「お前、ちゃんとシャンプーしてんのか？　さっきから頭掻いてばっかやないか」右フランカー森毛重隆（もりげしげたか）が突っ込む。鼻の下に蓄えたヒゲが社会人かと思わせる貫禄を漂わせているが、五年目を迎えた四年生である。
「す、すみません。癖でつい」
「ヘッドギアしたら掻かれへんぞ」
「ともかく！」昭子が遮る。「これで試合ができます！　もっくんが入ってフィフティーンがそろうんですよ！」
「もっくんてこいつかよ！」
「何者やねん。もしかしてあっちゃんの彼氏か？」
「ええ！　ウソやろ！」
　やめてくれよ！　しばいたる。オレもうラグビー部辞めよかな。十三個の口から新入部員歓迎とはほど遠い怒りと嘆きが溢れ出した。
「静かにして！　これで他部からメンバー借りなくっても試合ができるんだから、文句はなしにしてください！」
「誰でもええってわけじゃないやろ！　アメフトかサッカーから応援に来てもらえや！」
「これでDリーグ転落確実や！」
　まあまあ、と小林が制する。「体力に自信は？」
「残念ながら、今はまだ」昭子が勝手に答えている。「もっくんは今回ワールドカップ前の盛り上がりを見て、ラグビーをやってみたいと思ったらしいから」
　この九月二十日に開幕する日本大会だが、その陰でひっそりと話題になることもなく、九月八日に関西Cリーグは始まるのである。
「超ニワカやんけ」
「ムリムリ。辞めとけ」
「ちゃんと聴いて！　もっくんにはマネージメント能力もあるので、あたしの手伝いもしてもらいたくって、強引に誘ったってことなんやから、もっくんを悪く言うのは辞めてください！」
「そのもっくんって言う呼び方、スゲー気になるんやけど」
「ホンマ、それ。二人どういう関係？」
「昔おったとかいうアッシーとかメッシーとか言うヤツやないの？」
「それとも、ただのセフレとか？」
「アカンやろ、それ！」
「今言うたん、誰じゃ！　しばく！」
「はっきり言います！」昭子が一段と声を張り上げた。グラウンドが水を打ったように静まる。「本当のこと言えば、もっくんは高校時代の彼氏なんです！」
　うわあぁぁぁ！　何人かが地面に突っ伏した。拳でガンガンと地表を痛めつけてるヤツまでいる。
「もうアカン！　オレの昭子がぁ！」
「何でお前の昭子やねん！」

何だか大昔のラグビードラマを見てるみたいだが、そういうのは試合で負けてからやれよって。今じゃないでしょ！　まあこいつらも、半分ふざけてやっているんだけれど。

「高校時代って、今は違うってこと？」枯木英司が冷静に訊いた。

「はあ、一週間ほどで振られました」ともっくん。「やっぱ友達でいる方がよさそうって」

「そりゃそうやわ。こんな、ほら何ちゃらを探せみたいなヤツ」

「ああ、ウォーリーな」

その昔イギリスからやってきた絵本の登場人物だ。

あたしもう時間やから、と昭子は時計を見て、「もっくん、ちゃんと自己紹介しときや」と言うと、どこかへ駆けだしていった。

「おいコラ、お前」昭子が消えたとたん、フランカーの坂田が凄んだ。

「ま、待ってください！　ぼ、暴力は……」

「さっさと自己紹介せんかい、ボケ。もっくんとか、気色悪うて呼ばれへんやろ」

「ハハ、ハイ。元木由紀也と申します。理学部の二年生で、上田さんとは高校の同級生でしたけど、ここ、恋人どころか今はもう友達以下ですから」

「何で恋人でどもんねん、オラ」

「す、すみません。別に深い意味は……」

「それで？　うちは現状メンバーがそろってないんだけど、あいてるポジションといえば、右ロックしかない」とキャプテンも比較的冷静だ。「ロックはわかる？」

「ええ、はい。テレビではラグビーの試合よく見てますから」

「テレビ見てるだけでわかるんなら、誰も練習せんよな」

「そうそう。もう帰ってもらえや」

「いや待て待て。ここで帰らせたら、あっちゃん怒るぞ」イチローがみんなを制した。「あたしももう部活来いへんとか言うたら困るやんか」

「何かの役に立つんかよ、こいつ」

「色々やります！　僕、練習も一生懸命やりますし、ボール磨きも洗濯もやります！」

「待たんかぁ！　ボール磨きて……お前の唾つけんのかよ？」

ラグビー部ではボールに唾を吐きかけて布でゴシゴシこするのだ。

「あっちゃんの唾じゃなくて？」

やめろや！　やっぱりこいつ、いらんやんけ！　部員が口々にわめく。

宿沢はひそかに察した。どういうわけだかしらないが、グラウンドで冷遇されているボールと待遇のいいボールがあった理由を。つまり、こいつら、昭子が唾をつけて磨いたボールを奪い合っているにちがいないのだ。気持ちはわからないでもなかったが。

○

太陽学園大学は関西Cリーグの開幕、天保山大学戦を二十対八で落とした。

テンダイ（と学生は呼ぶ）は、昨シーズン入れ替え戦に勝利し、Dリーグから上がってきたばかりのチームである。つまり、Cリーグでは下位争いを演じるだろうと予想していた相手だ。リーグ昇格一年先輩の太陽学園としては意地を見せたいところであったが、心配していた通り最悪の結果となった。テンダイ相手にこの戦績では、上位と当たる今後が心配になる。

課題ははっきりしていた。部員の少なさだ。敵は後半になって、新しいメンバーをドンドンつぎ込んできたが、太陽学園は選手交代が実質不可能なのである。というか、サッカー部からまた金城の応援を頼んだから一人だけは交代が可能だったのだが、控えに回ったもっくんを試合に出す勇気は、誰にも湧いてこなかった。もっくんを引っ張ってきた昭子にさえ。

大阪環状線の暗い窓には、つり革にぶら下がる宿沢自身が映っている。隣には上田昭子の白い顔も。

「自宅どこだっけ？」

「古川橋です。自動車試験場の近く」

「じゃあ同じ電車で帰るか。オレ、守口なんだ」

オケイハンというキャラで、昔の野暮ったいイメージを一新した京阪電車沿線だ。いや、野暮路線を逆手に取ったというべきか。

「やっぱ試合行くんじゃなかった。大西先生からは行かなくていいからって言われてたんだしさ」

「はあ？　試合見に来ないって言うんですか？　顧問でしょ？」

「顧問つったって、オレ全くの素人だし。行ったってすることないじゃん」

「何言ってんですか！　強くするために考えなきゃならないことがいっぱいあるじゃないですか。春にやった喜連瓜破外大との練習試合みたいな状況になったら、先生に抗議してもらわなきゃ！」

「いや、向こうは専属の監督なんだろうけど、オレはただの顧問でしかねえからさ」

「どう違うんですか！」

ドキッとするほどの声のトーンだったが、周りの人間で気にしているヤツなんて誰もいないようだ。

「そう大声出さないで。……オレもよくはわかってないんだけど、高校野球なんかだと、監督だけが抗議できるとかってあるじゃんか。だから……」

「顧問は抗議しちゃいけないって言うんですか！　あたし、調べたんですよ。そうしたら、顧問と監督なんてほとんど違いはないって書いてありました。顧問は一応その学校の教師じゃなきゃいけないってのがあるらしいですけど、宿沢先生は条件を満たしていますから、顧問兼監督でもいいわけですよね。顧問だから抗議できないなんて言うんだったら、監督になってください！」

泥沼だ。オレは泥沼に片足を突っ込みかけているにちがいない……宿沢は言い返す言葉もなく、暗い窓の外を見た。大西鉄に頼み込まれて引き受けてしまったが、それは顧問など何もしなくていいとい

う言葉を信じたからだ。
「どう考えてもラグビー部なんてオレには……」
「先生、辞めるなんて言わないでくださいね。先生に見放されたら、ラグビー部は潰されます。ゼッタイ辞めるなんて言わないでください！」
窓に映る昭子の眼差しは、キッと宿沢の横顔を睨んでいる。
「わ、わかってる。ともかく次の引き受け手が見つかるまでは続けるよ」宿沢は弱々しい声でつぶやくように言うのが精一杯だった。
「約束ですよ。あたし、先生、信じてますから！」
先生の言うことなんて信じられません、と言われる方が、よほど気が楽だ。
環状線のアナウンスが京橋駅到着を告げた。

京阪電車のホームはさほどの混雑ではなかったが、昼間の熱気がこもっていて、立っているだけで下着に汗がにじんだ。
足下の目印に従って整然と並んでいる列と列の間に、一塊の集団がいた。皆大柄な体つきで、大きなバッグを足下に置いている。聞いていて恥ずかしくなるような女の話題など大声でしゃべり、時折ホームに頭を突き出してチッと唾を吐いた。
「うざいヤツら」昭子が小声でささやく。「ちゃんと列に並べって言うのよ」
「次の電車に乗るとは限らないから」
掲示板には「普通萱島行き」の表示。宿沢はその後の準急にでも乗った方が早いのだが、昭子に付き合って、普通でゆっくり座って帰ることにした。
白とグリーンのボディがホームに入ってくる。人波がジワッと前のめりになった時、列の外にいた例の集団が、相変わらずの大声をあげながら、宿沢たちの列の方へゾロゾロと近付いてきた。
「あいつら、乗るつもり？」昭子が横目で睨む。
降車する客はなく、ドアが開いた途端、先頭に並んでいた客を押しのけて、その集団は我が物顔に乗り込んだ。通路にドカッとバッグを投げ出し、当然のような顔をしてシートを占拠する。かろうじて座れそうだった宿沢たちに、空席は残されていなかった。
（最悪。何なんだよ、こいつら）心の中で思ってみても、声に出して言うほど青くはない。
「何か、むっちゃむかつく」まだまだ青い昭子ははっきり口に出した。
端っこに座った一人がチラリとこちらを見た。
「裏口国際大のアホどもですよ」さすがにこれは小声で、昭子がバッグに描かれたマークを指さした。
数ある関西圏の大学でも、なかなか褒めるところを見つけにくい学校として有名だ。だいぶん以前から定員割れしているという噂だが、受験生や在校生の実数を公表していないので、正確なところはわからない。ま、非公開というのが、無言で裏付けてしまっている気がするのだけれど。
知り合いの准教授に聞いた話だが、酷いクラスになると、半分ほ

どの学生が筆記用具すら授業に持ってこないらしい。教科書やノートなどいうまでもなく持参しない。手ぶらでやってきて、九〇分間寝るかしゃべるかボケーッと過ごして帰って行くそうだ。

それでもここ十年ほど、授業中に殴り合いのケンカをおっぱじめる学生がいなくなっただけ、平和になったのだそうな。

「ラックで顔面に膝蹴り入れたった」「相手、鼻血出しとったやんけ！」「スクラムん時、相手に回した腕に思いっきり爪立てたってん」

笑い声とともに物騒な会話が聞こえてきた。

「もしかしてあいつらラグビー部？」昭子が睨む。

「あのさ」宿沢は小声で、「ウラコク（世間では略してこう呼ぶ）って、うちと同じCリーグじゃねえの？」

「そうですよ」こともなげに言ってくれた。「今後のためにもケンカ売っときましょうか？」

口元に冗談めかした笑みをたたえているが、目は笑っていない。今後なんかじゃなく、ケンカ売ったら危ないのは今でしょ、今！とテレビに引っ張りだこの予備校先生みたいに叫びたかったが、無用な注目は浴びたくなかったので。

「上田さん、どういう性格してんの？」

「あたし、めっちゃ正義感強いんです。並んでる列に横はいりしてくる人間なんて、法律で死刑にしてやればいいんですよ！」

「そんな小学生のたわごとみたいな……」

「死刑になると思ったら、誰も横はいりなんかしないでしょ？　強盗や痴漢だって一緒です。死刑ってやっぱり犯罪抑止力があるんですよ。昔アフガニスタンをタリバン政権が支配していた頃は、みんな家に鍵なんかかけなかったそうですよ。他人の者を盗んだら、有無を言わさず死刑になったらしいですから。誰も泥棒に入ろうとしなかったんですよ」

「盗みと横はいりはレベルが違うでしょうが」

「おいコラ」と呼ばれたような気がしたが、全力で気付かないふりをしなくては。宿沢は声のした方に背中を向け、今さらながら昭子に向き合う姿勢をとった。

「上田さん、色白いよね」と、どうでもいい話題を振ってみたりしたが、もはや独り言のレベル。

「そもそも電車で横はいりするような人間が、ちゃんとした社会人になれると思いますか？」これは完全に声が高い。歴然と挑発している。「どうせ社会の役に立たないんだから、死刑でいいんですよ！」

「誰の話しとんねん、オイ」背後からの声も、さっきまでの明るい傍若無人トーンを逸脱している。

野江はまだか！　宿沢は次の駅で無理矢理にでも昭子を引きずり下ろす決意を固めた。それまでは、何とか気付かないふりに全力を注がねば！

ちなみに京阪本線の土居―滝井間はたったの四百メートルしか離れていなくて、ホームの端に立つと隣の駅舎が見えるのだが、京橋―野江の距離はその四倍も離れている。ってことは、陸上部が全力疾走しても四、五分くらいはかかるってことじゃん！　オイ京阪電車

よ、それより速いんだろうな、もちろん！
　などと、あらぬ考えを巡らせている間に、宿沢はすぐ真後ろに男臭い威圧感が立ちふさがったのを感じた。
「オッサン、舐めとんか」
　いやオレじゃねえ！
　一瞬昭子を差し出したい誘惑にかられたが、そんなことできるはずもない。
「な、何か用かな？」背中に昭子をかばう形に向き直った。
　そう、自分は教員だ、学生を守らねば……もうそれだけがどこかのオヤジの鼻歌のように頭の中に渦巻いて、脇の下をしたたり落ちる汗のことも意識から吹っ飛ぶ。
「誰が横はいりしてん？　え？」
「だ、誰も」宿沢は首を振って、「ちゃんと並んでた、と思うけど」オタクら以外は、という言葉は喉の奥深く飲み込んで、ここはともかく気を静めてもらうに限る。なのに。
「あれが横はいりやなかったら、何なん？」と、肉の盾となった宿沢の背後から、遠慮のかけらもない声。
　よく言った、と褒めてやりたい場面だ。例えばそれがドラマの中のワンシーンなら。だけど、今は違うでしょ！
「お前、何や？　オッサンの愛人か？　おお？　どっか売り飛ばすぞ、コラ」こめかみの辺りに物騒な傷のあるその男は、グイと顎を突き出して脅し文句を吐いた。
　座っている客はこれ以上無理ってくらい、座席に深く深く腰かけて俯いているし、立っていた客はドアの近くか隣の車輛へと避難して、宿沢たちは向かい合う優先座席の間にポツンとスポットライトで照らされたみたいに取り残された。
「あ、オレたち次で降りるんで通してもらえないかな」
　次はノエー、ノエー……待ちに待った車内放送だ。宿沢は昭子の腕をつかみ、男の横をすり抜けようとした。
「待てや、オッサン。言いがかりつけといて、そのまま降りるって？」
「あり得へんな」目の前にいるヤツの背後には、ラグビーをケンカと勘違いしてそうな面つきの男たちが立ちふさがって、今にもタックルをかましてきそうに身構えている。
「おらおら、通ってみいや」男が肩をそびやかし、宿沢に向かってグイグイと広い胸板を押しつけてきた。
「あんたたち、ラグビー部とちゃうの？　こんなヤーコみたいなことしててええの！　暴力沙汰起こしたら、出場停止食らうよ！」
「暴力沙汰て何や？　こっちこそ言いがかりつけられて、言葉の暴力で心を痛めとんねんけど。訴えたろか」
「君、その訴えるってのは、暴力にってことじゃないよね？」
「ほうほう、そういう訴え方もあるわけか」
　男が感心する中、プシューッとドアが開き、ノエーノエーと間の抜けた、嘔吐さえ連想させる連呼が響いた。けれど、吐きたいのはこっちだっつーの！
「しかし何に訴えるにしても、相手がおらなどうにもできへんやんけ。降りれるもんなら降りてみいや」と言いつつ、完全にみんなし

て出口をふさぐ。
「あたしら、こんなとこで降りへんし。寄ってこんといてもらえませんか、汗臭いから！」
上田さーん！　どっからそんな強気な発言が！
「何やとコラ！」傷の男は宿沢の肩越しに腕を伸ばし、昭子のTシャツをつかもうとした。
「暴力はやめなさい！」宿沢は思わずその腕にしがみつく。
「イタ！」
え？
「イタタ。オッサン何すんねん！」肘を押さえる。「ホンマ、イタイ。脱臼したんちゃうか」
するわけねーじゃん！　などと宿沢が一人で突っ込んでいる間に電車は動き出す。
「マジかよ！　どうすんねん、これ」
「信じられへん」
「電車ん中で暴れよるわ、このオヤジ」
背後の連中が勝手なことを大声でわめく。これこそ言いがかりというものだが、いきなりぶん殴られるのと比べて、対処が楽になったわけでもない。むしろ、暴力に訴えようとしないで、この連中、何を目的にしているのか、気味が悪いくらいだ。
「慰謝料もらわなアカンのちゃうか」
どうせそんなところだろう。だけど、金なんて払いたくない。
「だったらちゃんと医者に診せなきゃ。警察にも届けて」
「何やと？　疑うてんのか」
「じゃ、なくて！　診断してもらわないと、怪我の程度もわからないでしょうが」
「先生、こんなアホども、まともに相手するの、やめときいな」背後では相変わらず宿沢を盾にして、昭子が好き勝手なことを言う。
「脳みその代わりに鼻くそが詰まってるようなヤツらやねんから」
「ミソとクソを一緒にすんな、ボケ！」
こめかみの傷に青筋を立てて、男が脱臼したはずの腕を伸ばしてきた。肘を宿沢の横っ面にぶち当てながら、今度こそ男は昭子のTシャツをつかんだ。
「やめて！」
ああ、襟元からブラの紐が覗いちゃってるじゃんか……。
この肘がぶら下がったくらいで簡単に脱臼してくれるのならと、宿沢は本気で考えてみたりもしたのだが、その時不意に昭子の背後から黒い手が伸びてきて、シャツをつかんだ手首をひねり上げた。
振り向くと、でっけー黒人が立っていた。短く縮れた髪の毛は天井にくっつきそうだ。どうやら野江から乗ってきたらしい。さっきはヘド吐きそうなくらい大嫌いに思えた駅だったが、急に親しみのもてる駅名に格上げになった。
「暴力、アキマヘンガナ」と似合わぬ大阪弁。
「マジ、イタイて。そっちこそ暴力やんけ」
「日本ノ電車安全デッシャロ。ドウシテコンナコトシマンネンナ？」
黒人は腕を握ったまま、出口の方へ男を押し戻していく。

「知るかぁ！　お前こそ車内の安全乱しとるやないか。しかも変な大阪弁使いやがって！」
「ワタシ、止メテマンネヤワ。難シイ言葉デ言ウト、仲裁シテマンネン」
「難しあるか、そんな日本語！　オレら漢字で書けるぞ！」
　ウソだろ？　ウラコクって、自分の名前しか漢字書けねえんじゃないの？
「いつまで手握っとんねん！　ええ加減に離せちゅうとるんじゃ！」
「暴力フルウ、アキマヘン。モウヤメニシマッカ？」
「おのれに関係ないわい！」腕を掴まれたまま、向こうずねの辺りを蹴りつけた。
　が、その黒人は蚊に刺されたほどにも感じないらしい。「日本人、ミンナ平和愛シテマスヤン。ワタシモ平和愛シテマンネン。ダカラ仲良クシマンネヤワ」
「気色悪い大阪弁やめんか！　わーったから離せっちゅうんじゃ、コラ」
「仲良クシマッカ？」
「もう気力が失せたわ、ボケ」解放された手首をさすりながら、傷の男は吐き捨てた。
　裏口国際大学の面々はいずれも百八十センチ前後のガッチリした、いかにもラグビー部員らしい体格だったが、大男の迫力には圧倒されたようだ。その後は険しい目つきで宿沢や黒人の方をチラチラ見ていたが、大声をあげることもなく小声で何かささやき合うだけだった。
　いつの間にか普通列車は森小路も過ぎ、千林――ここは今となっては懐かしの元大手スーパーダイエー創業の地である――の声を聞くと、彼らは一斉に立ち上がってゾロゾロと出口へ移動した。
「覚えとけよ、コラ」
　チッと車内に唾を吐いて、捨てゼリフとともに出ていった。
「忘レマヘンデエ。マタ会イマンネヤワ！」
　黒人は日本語のニュアンスがわからないのか、陽気に手を振っている。動き出した窓の外では、ラグビー部員たちが中指を突き立て、「次会うたら殺す！」とわめいていた。

○

　太陽学園は放出（はなてん）法科大学戦、上方文化大学戦と開幕から三連敗を喫し、現在は野江教育大学と並んでCリーグ最下位を爆走していた。
　そして、いよいよ第四戦目は裏口国際大学である。昨年は太陽学園の一つ上三位のチームだが、鍛え抜かれたラフプレー技術でどこからも敬遠されている、リーグのヒール役だ。
　宿沢としては、京阪電車での因縁をこの機会にはらしてやる、などと意気込むこともなく、むしろ恨みを買うような事態を避けて、太陽学園は地味にひっそりと負けて欲しいなどと思ったりもしたのであった。さもなくば、いっそ宿沢自身が試合場に姿を見せずに済ますか……。

「先生！」
「ああ、ハイハイ」
「何、ぼんやりしてんすか？　作戦でも練ってんすか？」
もうこの期に及んでは、逃げ出すこともできそうにない。電車はすでにスピードを緩め、京阪千林のホームが近付いているし。
「まさかオレのこと、覚えてたりしないだろうな……」
「は？」
「いや、こっちのこと」
宿沢に許されるのは、ウラコクの連中が三歩歩けば過去を忘れるという鳩並みの記憶力の持ち主であることを願うことだけだ。宿沢や昭子のことを大脳のシワから綺麗さっぱり洗い流してくれていればいいのだが。
が、実際にはそれも虚しい願いとなりそうな予感がする。というのも、太陽学園にはとんでもない秘密兵器が加わったからだ。
あれは上方文化大学戦の翌日だった。重く沈んだ空気の中、練習にも身の入らない月曜日のことだ。
昭子がでっかくて黒い影を伴ってグラウンドに現れた。夕日を背負ってのっしのっしと近付いてくる巨大なシルエット。宿沢は思わず叫び声を上げそうになった。
「おい、何やねん、あれ……」部員たちもざわめく。
「紹介しまーす！」昭子が声を張り上げた。「バリバリの新入部員でーす！」
そいつの背中が今宿沢の目の前にそびえ立っている。身長二〇九センチ体重一三五キロの化物じみた巨体。その電車の天井にくっつきそうな天然パンチパーマを見ると、誰だってあの日のことを思い出さざるを得ない。そう、京橋―野江間で、ウラコクのラグビー部に因縁をつけられた、九月のあの日のことを。
こんなプロバスケ選手並の黒人をそう簡単に忘れてしまう頭脳の持ち主ならば、もはやラグビーのルールすら覚えられないだろう。いくらウラコクが名前を書いただけで合格する大学と噂されているにせよ、「仲裁」を漢字で書けると豪語するくらいの学力は持っているのだ。
それが上田昭子とそろって姿を見せれば、間違いなくあの時のことを思い出すだろうし、連鎖的に宿沢が一緒にいた男だということにも気付くだろう。
「君たち、ゼッタイに相手の挑発に乗るんじゃないぞ。ラフプレーにラフプレーで応酬するなんてこと、間違ってもやってはいけない」
恨みを買ったりしたら、電車でいつ顔を合わすかわからないんだから、宿沢は今後安心して京阪電車を利用できなくなる。
「わかってますって。試合が楽しみやなあ。ニカウさんはだいぶん特訓積んだから、今日は活躍してくれそうやし」
ニカウさんというのは、アフリカのチャドからやってきた、この留学生の愛称で、本名はニカッラグワンパティなんたらかんたら、という日本人には発音しにくい名前だ。こんな一目見たら記憶から消去しがたい大物が大学内で発見されずにいたのは、入国審査に必要な書類の不備で、来日が大幅に遅れたからである。九月のあの日

ニカウさんは日本に着いたばかりで、まだ大学には一歩も足を踏み入れていなかったのだった。

どこにいても目立つこの巨体をいち早く見つけて、ラグビー部に連れてきたのは昭子の手柄だが、いかんせん今回は相手が悪い。せめて裏口国際大学との一戦が終わってから入部してくれていたなら……。

「今日の相手はね、ニカウさんがあたしを助けてくれた時に絡んできてたボケどもやから、遠慮せずにぶちのめしてや」

「え？　どゆこと？」と、色めき立つ部員たち。

試合前に必要以上の闘争心をあおるのはよくない……とつぶやいた宿沢の言葉など、誰も聞いちゃいねーじゃん！

昭子が語ったニカウさんの武勇伝に、太陽学園ラグビー部員たちは地団駄踏んで悔しがり、まるで千林商店街を行く通行人までもがヒールに一役噛んでいるかのごとく、辺りを睨みながらのし歩いていく。

「ほんで、先生は何してはったん？」

「オ、オレ？」

「先生はガタガタ震えてるくせに、肉の楯となってあたしを庇ってくれようとしてはったんですよ」

「おお、やるなあ。オレ見直したわ」

「ホンマホンマ。ゼッタイ逃げると思うてたけど」

「電車ん中やから逃げ場なかったんちゃうの。楯になったんじゃなくて、一歩も動けんかったとか」

好き勝手なことをひとしきりほざいた後、今日は見といてくださいよヒーヒー言わしたるから……って、宿沢の不安をあおり立てた。

向かう先は裏口国際大学千林商店街北グラウンド。予定されていた豊里河川敷グラウンドが先日の大雨で水浸しになったため、急遽代替地に選ばれたのだ。太陽学園大学にとっては、完全アウェー。下手に勝利しようものなら、無事にこの地を出ることはかなわないかもしれない。

ウラコクフィフティーンの目は、当然ニカウさんに集中するだろう。そりゃそうだ、電車の中でも商店街でも、過ぎる者みなニカウさんを見ている。大阪名物ヒョウ柄のオバチャンなどは、八百屋の店先から突然走り出てきて、いやぁボビー・オロゴンちゃうの、ちゃうちゃうマイケル富岡やんか、あんたそれ言うんならマイケル・ジョーダンちゃうのんか、冗談やがな、と、けたたましく騒ぎながら、ベタベタとニカウさんの尻や股間にタッチした。

「いやまあ、他の兄ちゃんらもええ身体してるやんか。何の集団やの？」

「ラグビー部です」

「ああ兜や鎧付けて走り回るヤツや」

「それ、もしかしてアメフトのことちゃいますか？」

「そうなん？」

「今ちょうどワールドカップやってますやん」

「ああ、あれ？　あれバレーボールとちゃうの？　石川くんとか出

てるやっやろ？」
「いや、見て、このぶっとい腕！」
「うわ、こんなんで抱きしめられたらどないしたらええのん。もうたまらんわぁ」
「急ごう」宿沢は商店街を抜けるまでに引きずり倒されそうな部員たちを促した。
「ほんで今日は何？　試合？」
　オバチャンだけでなく、ねじり鉢巻きの魚屋のオッサンや鼻を垂らしたガキまで一緒についてくる。戦後間もない時代にタイムスリップしたかのような錯覚を覚えて、宿沢は頭がクラクラした。
「オッサンがヘッドコーチっちゅうヤツか？」声とともに何かが宿沢の手の甲に触れた。
　ズルンと、感触的にはナメクジか、いやもっと固体度の低い青ばなみたいな……。
「コラァ！　人の手ではなを拭くヤツがあるか！」
　宿沢は慌てて手を振り、しつこく絡みつく抹茶オーレ色のそれを、ガキのほっぺになすりつけた。
「かまへんやんけ、はな水くらい」
　いいわけねーだろ！
「ほんで、こっち向かうっちゅうことは、相手は？」と魚屋のオッサン。
「もちろん裏口国際大学さんです」
　魚屋は大昔のコミックソングみたいに「ギョッ」と驚いてくれることもなく、「来たできたで」と、嬉しそうに舌なめずりをした。
「こら、応援にいかなアカンのちゃうか」拳をもう片方の手の平に打ち付けながら。
　ウラコクって相手方に応援団を集めるほど、ジモティーに嫌われているのかと一瞬錯覚しかけたが、三、四十人ほどの集団にふくれあがってグラウンドに着いてみると、商店街からくっついてきた金魚のフンは、全員ウラコクの応援に回った。
「やっぱし完全アウェーじゃんか」
　もし勝ってしまった場合、京阪千林までたどり着く自信を、宿沢は完全に喪失していた。
「何じゃ、このどでかいお釈迦さんは。しかも日焼けしすぎやんけ」
　センターラインに整列して、ウラコクフィフティーンは無遠慮に言い放った。
「変なガイジン入れやがって。さっさとアフリカ帰って、穴掘って寝ろ」
「お前、それアカンて」別の一人が止める。「国に帰れ、言うのアパルトヘイト法で禁止されとんねんぞ」
「アパルトヘイト法て何や？」
「それ、ヘイトスピーチ法のことちゃうんか？」
「それそれ。訴えられたら逮捕されんがな」
「マジかよ。オレ、まだ前科ないぞ」
「ちょうどええ機会やんけ。前科持ちで就活有利になるんちゃうか」

どういう業界に就職するつもりなんだ……というか、それって、いきなり前科持ちにはならねえんじゃないの？　などという宿沢の見当外れの疑問など無視して、ウラコクフィフティーンが不意に顔を寄せ合った。おいこいつ、もしかしてあれちゃうか……チラチラと太陽学園側ベンチに視線を送ってくる。

「バーカ！」昭子がいきなり立ち上がって叫んだ。「試合前になって、こそこそ相談なんかするんじゃなーい！」

「挑発してどうすんの！」宿沢は慌てて袖を引いた。

「な？　あの女」小声でウラコクが頷き合う。

絶対気付かれた。せめて宿沢にだけは視線が向かないよう地味〜に振る舞わなきゃ。

ピピピーッ！　審判の笛が緊張した空気を切り裂いた。「はい始めます！」中央に立って手を上げる。「いいですか。双方ともフェアプレイ精神で！　それじゃ、代表！　じゃんけんして」

グーを出して勝った右センターヒラメがキャプテン小林を振り向いた。「陣地」小林は空を見上げながら、風下を選んだ。後半風上に立って、少しでも疲労を和らげようという作戦だ。

ピピーッ！

○対○で迎えた前半十二分。審判が相手側に手を上げながら、シューズの先で地面をえぐった。フッカー吉田が密集の中で寝そべって、ボール出しの邪魔になったらしい。倒れ込みの反則で、相手にペナルティが与えられた。

「何やってんのよ、吉田義男！」昭子がベンチから怒鳴る。

阪神タイガースの吉田義男は現役時代華麗なプレーで牛若丸とも呼ばれたが、グラウンドの吉田義夫は、五条大橋で牛若丸に愚弄された弁慶のごとく、テンメートルライン付近で転がっていた。その傍らで、相手キックが決まり三点が入る。

商店街からくっついてきたギャラリーが手を叩いて喜んだ。

「なんでいきなり三点なん？　スリーランか？」とヒョウ柄のオバチャン。

「相手三人倒したからな」平然とウソの解説をかます、魚屋のオッサン。

宿沢はその解説に「ウオッ」と魚に引っかけた洒落で驚いて見せたが、誰にも気づかれることなくスルーされる。

二十分過ぎ、真っ直ぐ走るしか能のない元サッカー部員増穂が、こぼれ球を拾い上げて相手陣深く突進した。タックルを受けて倒されたが、フォローのイチローからヒラメ、そして左ウィング小畑へとボールが渡る。

増穂のスピードに遅れていた相手ディフェンスが、陣形を立て直して小畑に迫る。

宿沢を教壇でひざまずかせ、太陽学園ラグビー部員をことごとく投げ転がした必殺技は、大東流合気柔術という古武術なのだそうだ。ウィングとしてはそれほど足の速くない小畑だが、迫ってくるウィング、フルバック、最後にＮＯ８を宙に舞わせると、残りの包囲網をスルスルとかいくぐって逆転トライにつなげた。ゴールも決まる。

「ちょい待ちいな！　なんで七点も入ってんの！」
「そら七人倒されたからやろ」
「どっから数えて七人なん？」
「ええと……あの……真ん中あたりちゃうか」
「そういえば、この人ら鎧つけてへんがな」
「時代がちゃうねん。んなもん戦国時代の話や」魚屋がしたり顔で講釈を垂れた。
　バカでね？　負けているとイラつく間抜けな会話だが、リードを奪って余裕を持つと、こっちもいっちょベンチからずっこけてみせてやろうかなどと思ってしまう。が、そんなリアクションも一人芝居で終わる公算が大きいから、宿沢は心の中で孤独に突っ込むだけにとどめておいた。注目集めちゃ困るし。
　二十九分、ウラコク側のキックが強風に乗り、太陽学園陣の二十二メートルラインを越えて大きくバウンドした。跳ね上がった楕円球をスタンドオフ枯木がジャンプして捕球する。着地する瞬間、ウラコクの右プロップ推定一三五キロのデブが名古屋場所にでも出ている気になったのか、頭からのぶちかましを枯木の腰へ食らわせた。枯木はボールを抱えたまま吹っ飛ばされ、タッチラインを遥かに超えて、グラウンド端のフェンスまで転がっていった。
「危ないやん、バカァ！」昭子が絶叫する。「ノーバインドタックルやんかぁ！」
　腕で捕まえるようにタックルせず、相撲の立ち会いみたいに身体ごと相手にぶつかっていくタックルは反則だ。しかも、着地前タックルでもある。二重に危険なプレーに怒り狂ったインドが、まだ寝そべっているウラコクプロップのジャージを掴み、引きずり回したあげくに、スパイクで強烈な蹴りを見舞った。タッチライン付近には、あっという間に両チーム選手の山が出来上がる。
「いてまえー！」ヒョウ柄のオバチャンが吠える。
　パンパパンパン！
　すぐ傍らで起こった炸裂音に度肝を抜かれ、宿沢は今度は本気でベンチからずり落ちた。
　くっついてきたはな垂れガキ数人が、爆竹にライターで火をつけ空中に放り上げてはしゃぎ回っている。な、なんという試合なんだ、これはいったい……宿沢はもう現場放棄してとっとと帰ってしまいたかった。
　ピ、ピイー、ピーピーピー！　止めに入る審判の笛も何だかお祭り騒ぎを盛り上げる楽器の一つと化したようにしか聞こえない。
「サンサンナナビョーシ！」魚屋のオッサンが立ち上がって、指笛で観客を扇動し始めた。「それ、ピッピッピ、ピッピッピッピッピ、ピッピッピ」
　審判の目が血走っている。持っていたボールを叩きつけて叫んだ。
「**いい加減にせんかぁ！**」
　審判がこんなに怒ったのって、初めて見た。試合内容がどうこうというより、周りで騒ぎまくる外野に業を煮やしてるんじゃないのか？
「これ以上やると没収試合にします！」

いや、もう即座に没収試合でもいいんだけど……宿沢の思惑などもちろん考慮することなく、両チームのキャプテン及び宿沢とウラコクヘッドコーチが呼ばれ、厳重な警告を受ける。

「なお、ブラック三番は十分間のシンビン、オレンジ五番は退場とします」

「なんでよ！　不公平じゃん！」

昭子の抗議にようやく落ち着きかけた審判が、また燃え上がる。

「黙りなさい！　あの蹴りは意図的で悪質だ！　文句があるならここでやめてしまってもかまわない！　試合放棄するんなら勝手にしなさい！」

「そんな！　酷い！」

「上田さん、まあ座りなさい」宿沢は昭子の裾を引っ張った。「ともかく今はリードしてるんだ。冷静になろうよ」

「おいこらぁ！　こんな盛り上がっとんのに試合放棄なんかしやがったら、お前ら、ここから無事帰れると思うなよ！」

魚屋が凄み、ヒョウ柄もクリーニング屋も青っぱなガキンチョも、二度と千林の地を踏まさないとばかりにわめき散らす。

「インドさんがいないまま最後までって……」

「イチローさん！」もっくんがサイドラインから呼びかけた。「相手の背後に徹底してロングキック蹴りまくりましょう」

「わかってる」イチローが頷く。

背走させられるのは、前に進むより何倍も疲れるという。ともかくリードを保って、相手のスタミナをそぐ作戦で行こうというわけだ。それがうまく当たって太陽学園が勝ってしまったりすると……想像しただけで宿沢の金的は縮み上がった。

前半はどうにかリードを保ったまま逃げ切った。そして後半、不気味なほど静かに試合は滑り出した。キックの応酬が続き、風上の太陽学園側が徐々に相手陣深く攻め込んでいく。グラウンドでは試合開始当初よりも強い風が吹き始めていた。四分が過ぎたところで、枯木の蹴ったボールが相手のノッコンを誘った。

裏口国際大学陣テンメートル付近でのスクラムだ。

退場になったインドの代わりにＮＯ８に入ったイチロー（その代わり太陽側のフルバックは不在になった）がボールを掻き出した。スクラムハーフ田村の手を経て、枯木へ、さらにセンター松尾へと渡る。ディフェンスが押し寄せ、松尾が倒されてラックになった。

ラックとは両軍選手が地面に倒れている状態で、この時選手はボールを素早く手放さなくては反則を取られる。手を離れたボールに対して、倒れている選手は手を使ってのプレーはできず、足で密集の外へ掻き出さなくてはならない。ラグビーとはまったく不便極まりないゲームだが、この密集でのプレーの巧拙が試合を左右することも多い。宿沢のところからはボールがどうなっているのか見えず、思わず立ち上がったり腰をかがめたりしたが、やっぱり何も見えなかった。

ピー。笛が鳴って、再度太陽学園側のボールでスクラムが宣告される。「クラウチ、バインド、セット！」審判の声とともに、スク

ラムを少し押し込んでボールが出た。
　リズムよくボールがバックスの手を経て、切り札の小畑に回る。タッチラインに沿って走る小柄な身体に、相手ディフェンスが殺到した。一人二人と投げ飛ばす間に、オレンジと黒のジャージが集まってこれからミンチにされる肉のようにかき回され、ポーンと何か黒い物体が空中に放り出されて動きが止まった。
「完全にマークされてますね」もっくんに指摘されるまでもなく、群がった相手の数は太陽学園側より圧倒的に多い。「小畑くん、靴脱げてる……」
　集団の中で高く跳ね上げられたのはスパイクだったようだ。小畑が足首を押さえてうずくまる。
「大丈夫かな？　うちはメンバー交代できないし」昭子が心配そうに見つめる。
　一人いなくはないんだけど……宿沢はチラッと横目で覗う。もっくんが困ったように目を伏せた。

　その後、裏口国際側がワントライツーペナルティゴール、疲れの見えてきた太陽学園側がどうにかペナルティゴールを一本返した。得点は十四対十で、裏口国際の四点リード。
「野球は八対七が一番おもろい言うけどな」と魚屋のオッサン。
「ほな十四対十いうたら、一番おもろいレベルを越えてるやんか」とヒョウ柄。
「そや。歴史に残るゲームかもしれんぞ、こら」
「いやホンマ、兄ちゃんらが抱き合うたり寝転んだりするの見てたら、身体の芯がなんや疼いてしょうがないわ」
　商店街軍団の勝手な会話をよそに、小畑はその後明らかに足を引きずりっぱなしだ。今ももみ合っているラックの外に立って、しきりに屈伸を繰り返している。
　笛が鳴って、裏口国際大学ボールのスクラムになった。また誰かのシューズが転がっている。右センターヒラメが慌てて拾い上げ、靴を履いた。
「先生」不意にもっくんが立ち上がった。「ボクを入れて下さい」
「何言うてるの。もっくんはマネージャーやんか」昭子が遮る。
「あいつら、シューズの紐を解いてます」
「はあ？」
「密集の中でこっそりこっち方の靴紐を引っ張ってるんです。二人ともそれでやられたにちがいありません」
「そんな卑怯な……。先生、審判に訴えて下さい！」
「いやダメだ。審判が何も言わないということは、見えてないということです。ならば証拠がありません。……残り時間十五分を切りました。ボクが入ります」
「もっくん、どうする気？」
「作戦があります。ボクが入ってそれをみんなに伝えます」
「君、ろくすっぽ練習もやってないでしょ？」
「だけど、ボクもリザーブとして登録されてます」毅然と言い放った。

普通に立ってるだけでもどこかが折れてしまいそうなひ弱なもっくんの身体じゃ、タックル一発で救急搬送の可能性がある。だけどもしそうなったら……宿沢の心の奥から熱いものがこみ上げてきた。

元木！　お前一人を死なせはしない！　お前にもしものことがあったら、オレも一緒に救急車に乗ってやるからな！

「……わかった。オレも覚悟を決める。絶対勝って帰ってこい！」

勝って、みんなで堂々と商店街を通って帰ろう。宿沢の頭の中を、四年前のあのワールドカップ南ア戦の劇的トライが駆け巡った。テレビ画面の向こうで、拳を突き上げ涙を流していた日本人観客の顔……。

何としてでも勝て！　勝ってみんなで涙を流そう！

「審判！　交代！」

「え？　オレ？」

グラウンドでヒラメが憮然とした顔で宿沢を見た。もっくんとテンションの低いタッチを交わしてベンチに戻ってくる。

汗を拭い、ベンチに座った。その間にも試合は時間を刻んでいく。もっくんの動きを見ていると、ヒラメが交代に不満げな顔を見せるのも当然だった。

「先生、なんでオレの代わりに元木なんすか？　あいつ、何の役にも立ちませんやん」

ヒラメの言うとおり、もっくんは疲れているはずのメンバーが甦ったかと見えるほどもっさもっさとフィールド上を徘徊するばかりだ。例えるなら、介護保険の対象にでもなってしまいそうな動きの悪さを露呈している。恐れていた強烈なタックルの洗礼もなく……というのも、誰ももっくんにはボールを回さなかったから、まるでいじめられっ子みたいに、ぽつんと一人で放置プレーに興じている有りさまだ。

「ヒラメさん、彼には必殺技があるんです」

「あっちゃん、あんなヘタレにコロッと騙されるなんて、まだ青いわ。どうせ、ああやってノーマークになっといて最後にトライ、とか考えてるんやろうけど、あんなヤロウ、もし仮にインゴールでボール受け取っても、絶対トライとらしてくれへんで。ラグビー舐めたらアカン。そもそも代えるんやったら、オレやなしに、オバやろ」

オバこと小畑は、ボールを奪い合う集団から離れて、こちらも一人サイドライン付近をうろうろしている。敵はとっくにシンビンがとけてフルメンバー、こっちは一人が退場、二人が放置プレイヤーの十二人態勢。勝って帰ると決意したのは……時計を見ると、もう十分も前の過去の話になってしまった。

残りは三分。

元木を送り出した瞬間気持ちは高ぶったが、まあ当初の思惑どおり千林商店街をすごすごと無事帰ることになりそうだ。……うん、何の問題もないじゃないか。最初からそのつもりだったんだし、今さら敗戦に涙を流すこともない。

なんてくよくよ考えている間にも、残り時間は一分を切った。まっすぐ走るしか能のない増穂なんかもうゲームを諦めてしまったのか、

ずいぶん後方でのんびりと控えている。
みんな、よくやった……そう言って迎えてやろう。ホント、なんだか久しぶりにいい夢見た気がする。ほんの一瞬だったけど、近ごろ死にかけていたオレのハートに火をつけてくれたんだから……宿沢はベンチから立ち上がった。
その時、どよめきが起こった。フィールドにもギャラリーにも。
楕円のラグビーボールがアメフトのボールみたいにグラウンドの遥か上空を飛んでいく。何が起こったのかわからなかった。
「何ちゅう肩しとんねん……」ヒラメが呆然とボールの行方を追う。
向こうのサイドライン際から、ニカウさんがオーバーハンドでボールを斜め後方にぶん投げたのだ。ちなみにフィールドの横ラインは六十九メートル以内と決められている。ここウラコクグラウンドもほぼそれに近いサイズだ。楕円球はクルクルと回転しながらこっち側のサイドラインに向かって飛んでくる。そしてそれは、小畑の胸にすっぽり収まった。
人数の余っていた敵のバックスだが、さすがに小畑までの距離は遠かった。小畑は難なく数メートル前進した。が、いかんせん、スピードがない。ウラコクは態勢を立て直し、小畑に迫った。
ゴールラインまで十メートル。このプレーが切れたら終了の笛が鳴る。
小畑にタックルが刺さる。一人は転がしたが、別の一人の痛烈なタックルが小柄な身体を吹っ飛ばした。小畑の手からポーンとボールが弾んだ。
そこによたよたとよろめきながら走り寄るもっくんの姿があった。
「ああ、ヤバイ！」
「もっくん、逃げてェー！」
叫び声も虚しく、敵が一気に殺到する。だが、もっくんは目測を誤っていた。頭上高く必死で伸ばした指の先が楕円球にわずかに触れただけで、ボールはもっくんをスルーしていく。次の瞬間、二人がかりの強烈なタックルが刺さり、戦争映画の地雷を踏んだ兵士みたいに、もっくんはグラウンドの外へ気持ちよく飛んでいった。
「ノ、ノーボールタックル……」言いかけた宿沢の声がかき消された。

イケエエェェ！

ヒラメとインドと昭子が揃って絶叫していた。
後方から全力で走り込んできた増穂がボールを抱えて走っていた。まるでウサイン・ボルトがフィールドに降りてきたみたいに見えた。誰も追う者はいなかった。
ゴールポストの横に、増穂が勝利のトライを叩きつけた。
「なんやの？　どうなったん？」
「九回裏代打逆転サヨナラ満塁ホームランみたいなんとちゃうんかいな」
商店街軍団がざわめく中で、イチローのゴールキックが決まった。
その瞬間、長い笛がフィールドに響き渡った。
十四対十七。
「か、か、勝ったのかよ……」膝から力が抜けていった。放心した

ように、宿沢はベンチに座り込んだ。
最後のあのプレーが本当にもっくんの作戦通りのプレーだったのかどうかよくわからなかったが、宿沢にはもうそんなことはどうでもよかった。泥まみれのフィフティーンの姿は、涙にかすんで見えなかった。

○

「おう、ちょい待ったれや」
やっぱり来たか！　こんな連中に待てと言われて待つバカはいない。聞こえなかったふりをして、宿沢は一番先にフェンスの扉を潜った。
「何やねん」と背後でインドの声。途中から試合に出られず、きっとイライラを溜め込んでいたにちがいない。
「お前に用事やない。ひっこんどれ」
「何やと？」
「う、う、上田さんに……」
「上田？　って誰や？」
「あ、あたし、上田だけど」
「あっちゃん？」
昭子が太陽学園フィフティーンをかき分け前に出た。
「うう、上田昭子さん！」
声を裏返らせたのは、京阪電車の中で出会った、例のこめかみに傷のある男だった。
健闘をたたえ合うでもなく、かといって殴り合う雰囲気でもない、微妙な空気に周りは静まった。
「ぼ、ぼ、ぼくとつきあってください！」男は頭を下げ、右手を差し出した。
何だよ、それ！
と、突っ込みを入れたくなったのは、むしろ昭子本人の方だったろう。「あんた、一応キャプテンでしょう？　これって何ですか？　負け試合の罰ゲームかなんかですか？」
「違います！　ガチで言うてんです！」
「ほな、お断りします。あたしにはすっごい素敵な彼氏が、ほらここに、十六人もいてるんですから！」
ええぞ、あっちゃん！　よう言うた！　一斉に歓声がわき上がる。その声にかき消されてしまったが、傷の男が「ほな、オレは十七番目でも……」と呟いたのを宿沢は聞き逃さなかった。
そして、宿沢は一人寂しく思ったのだった。じゃあ、オレは十八番目以降ってことかよ……と。
了